



熊野古道
くまのこじよう
記

45

秋が深まるとな山野の
ススキの穂が白髪の穂
に変わり、年齢のせい
か、親しみを覚える。
ちょうど新聞に掲載さ
れた真っ白なススキ。

覆われた生石高原の写真が目に留まり、登りたい衝動に駆られた。広川町の稻むらの火祭りが行われた10月15日、正午に生石高原の頂上に着く予定で和歌山市駅を車で出発。阪和自動車道から県道を経て国道480号を有田川上流の二川沿いに行くこと40分、有田川町（旧清水町）の栗生付近に来ると、アユ釣りの釣り人が数人澄ん

ここまででは神社の神木となる巨木を足元から見上げ、木の国の偉大さと畏れを感じた。今ススキ越しに見る山並みは、地球の營みが生み出した生命力を宿していると思った。ショベルカーでは到底創れない山川の褶曲、自然の美しさは言葉で言い尽くせない。

「気持ちいい」「わ
あ広い」「お弁当にし
ようよ」の歓声が聞こ
えてきた。私は背丈ほ
どのススキの穂に触れ
て、忘れかけていた小
学3年時の遠足を思い
出した。いつもの遠足
と違って、リュックか
風呂敷持参の山登りと
告げられた。登った経
験のない山に群生する
ススキの穂の前で先生
いわく「今日はお国だ

き上げてくる風に揺れ
るススキの穂が、逆光
線でステンドグラスの
ようにキラキラときら
めき、美しかった。ス
キを軍事物資や屋根
葺きに使うことはもは
やない。だが、草原や
道路脇に生えるススキ
は防風垣や土砂流出防
止の役割を果たしてい
る。木の国の森や林が
營みを続け、生態系を
維持するため、なくて
はならない存在である

生命力宿す「木の国俯瞰図」

だ水面に糸を垂らして
いた。祭礼行事として
歌舞伎を奉納する城山
神社、治水と発電目的
で作られた二川ダム

かに見る笠石に登ると
視界が更に広がり、「木
の国の頂上」に登つた
かのような錯覚に陥つ
た。

ために働いてもらうぞ。これからススキの穂を刈り取るのだ。重隊の野戦病院の枕と布団の綿代わりにする。

ことに気付かされた。
今年、ノーベル医学
生理学賞を受賞した大
隅良典・東京工業大学
薦教授の「役に立つ、

軒先に山菜を干す農家など山村風景を右手に見て間もなく、県道野上清水線に入る。S字の上り坂を一気に進むこと10分、頂上からほとんどの山系が足もと

足元には、広い2本のスロープがススキの白い穂のか一ペットで覆われ、はるか下方に幾重にも延びていた。笠石を降りた場所にあるススキに囲まれた広

多く供出したら車から
ご褒美があるそうだ。
頼むぞ」。私は「ラジ
オで戦勝の放送は聞く
けど、綿まで不足とは
……。本当に勝てるの
か」と疑問を持ちながら

事業になる科学技術だけを求めていくと、文化のない社会に墮ちていく」という言葉を用いて、さうした祭りへと向かっていった。

まで伸びていた。「木の国俯瞰図」の眺めが足元に広がった。

場では、家族連れやカップルがそれぞれに開放空間を満喫していく

ら、黙々と刈り取った
風に誘われてスロー
プを下りてみると、吹

ふわふわと山肌覆ふ
ススキの穂 秦華

生石高原に立つて（有田川町）

繪と文・熱田親憲

題字·熱田秦華